

Book Review 30-8 マンガ # ゴールデンカムイ

『# ゴールデンカムイ 全31巻』（野田サトル著）を読んできた。札幌・松前移動の車の中でのみ読んだことと予約が多くて中々借りられず、半年かけての読書となった。

著者は第54回ちばてつやヤング部門大賞を受賞。『# ゴールデンカムイ』でマンガ大賞、第22回手塚治虫文化賞マンガ大賞、第51回日本漫画家協会賞コミック部門大賞を受賞。アニメ化、実写化もされている。

物語は、アイヌたちが密かに貯めた20貫の金塊を求めての旅物語である。主人公一行が道内を、金塊の手がかりを求めてあちこち移動するため、なかなか話が進まない。それが楽しいのかもしれないが・・・。

話は1907年に始まる、日露戦争終結後明治末の北海道が舞台。5年前（1902年）、アイヌたちが密かに貯めた20貫の金塊をある男がアイヌたちを皆殺しにして強奪した。その男は金塊の隠し場所を誰にも伝えずに捕まり、網走監獄に収監される。足の腱を切られ脱獄不能となった男は、獄中から外の仲間に金塊の在処を伝えるべく24人の囚人の体に金塊の場所を記した刺青を彫る。それは全員で一つの暗号になっており、金塊を狙った屯田兵による移送の最中に囚人全員が脱獄していた。そこで、刺青を彫られた脱獄囚を追うことになる。

日露戦争の帰還兵杉本（「不死身の杉本」）とアイヌの少女・アシリパが手を組んで、手がかり（囚人の皮膚に彫った刺青地図）を追う。アイヌ文化や日露戦争、帝国陸軍の情報量がふんだんに盛り込まれている。自然や人体の描写がとても緻密かつ綺麗である。ギャグ要素（下ネタ言葉）も多い。アシリパちゃんが魅力的である。危機が迫るとこちらがドキドキしてしまう。

まず小樽から調査開始。その際に様々な人や集団に遭遇する。危機を乗り越えるにあたり、様々なアイヌ民族の知恵（蘊蓄）が描写される。食物（採取の仕方や調理法）や狩猟に関する知識が半端ではない。調査の過程で、「脱獄王」の異名を持つ白石を捕縛する。そして函館戦争で死んだはずの土方歳三も出現。敵方として、金塊を使い北海道征服を画策する第七師団所属の情報将校鶴見中尉が絡んでくる。蝦夷共和国の再興を目指して刺青の囚人・牛山、元新選組の永倉新八も参加。

アシリパの父親だと語る男の話の真偽と金塊の在処を確かめるべく、アシリパー一行は網走へ向かう。次に日高（熊と遭遇し格闘）へ移動してゆく。

一方夕張を訪れた鶴見中尉は、刺青人皮を所持していた剥製師と接触し、アシリパー一行を混乱させるため贋物の刺青人皮を6枚作らせる。話が複雑になってゆき、この辺で筋を追うのが大変になる。（各巻の始めに前回までの経過がマンガで1頁にまとめられているが・・・）。

その後、旅は、第七師団本部のある旭川、そして大雪山を通過して釧路へ。それから、アシリパー一行は思いを錯綜させながら網走監獄への潜入を計画する。そこで一騒動も二騒動も起こる。

次は樺太へ向かう。そこでロシアのパルチザンに遭遇し、様々な危機に直面する。樺太を無事脱出し、北海道で再び刺青の囚人を探す旅となる。ある情報から砂金掘りの絡みで雨竜川、石狩川、支笏湖へ向かう。石川啄木も登場。戦闘場面には札幌麦酒工場が使われる。

終に贋物の判別に成功したアシリパー一行（鶴見中尉一行も）は、金塊が函館にあると推定。土地の権利書と半分の埋蔵金を発見する。そこはどこか。金塊埋蔵場所（有名な史跡・観光地）で、すさまじい戦闘が展開される。読んでいても手に汗握る場面が続出である。函館駅行きの列車内の戦闘もすごい。

最後に、この埋蔵金が第二次大戦後のソ連の日本侵略阻止に貢献したことが語られる。アシリパーが本当に守りたかったものはアイヌ民族の文化であり、それによって守られてきた自然である。迫害され続けた弱者の視点が全編を通じて貫かれている。読後感は清々しい。

食べ物関連やアイヌ文化に興味を持った方には新書の『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』と『ゴールデンカムイ絵から学ぶアイヌ文化』が出版されている。